

## 地質図に見る模様

<平野英雄・安田 聡・川畑 品>

地質図のいろいろな模様(パターン)は、地質体自身の分布、表現精度、地図作成時の地質学の水準などによってきまる(平野ほか, 本文参照)。ここに地質図幅から切り取った6つの模様を表した。以下、「5万分の1地質図幅名、発行年」(その地区の県名・地質構造区)、すべて同縮尺、図Aのスケールバーは1km。

- A. 「万場, 1969」(群馬県, 秩父帯)、付加体地質学の考えが広まる前の地質図で、石灰岩層(青色)がレンズ状に切れぎれに分布しているが、全体はゆるいドームのおどやかな構造として表されている。
- B. 「四谷, 1994」(京都府, 丹波帯)、頁岩やチャート中の微化石による堆積年代を用いた地質図で、付加体に特徴的な地層境界に沿う多数の衝上断層によって、地層の切断と繰り返しが生じていることを示している。
- C. 「高田東部, 1994」(新潟県)、向斜と背斜構造によっ

て、1つの凝灰岩層(ピンク色)による2つの口紅マーク模様が生まれた。

- D. 「浪江及び磐城富岡, 1994」(福島県)、中央の南北の帯(双葉破砕帯)と、東側に分布するほぼ水平な新第三紀層、新第三紀層の複雑な模様は、厚さの薄い水平な地層が等高線に沿って分布しているために生まれた。
- E. 「本吉, 1994」(鹿児島県)、遭難したタンカーのような模様は、西に傾く向斜軸をもつ始新世の地層(黄色、青、赤紫色)を始良火山噴出物(ピンク色)が不整合におおっているために生まれた。
- F. 「岐阜, 1999」(岐阜県, 美濃帯)、堆積岩があたかも火山岩脈のように分岐しているような模様は、トラップのカードをシャッフルしたような構造(付加体特有の地層境界に沿う多数の断層が存在)を精密な微化石層序に基づいて考案した成果の現れである。

(関連: 本文41ページ)

